

令和 4 年 6 月 5 日現在

機関番号：12102

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2017～2020

課題番号：17H02291

研究課題名(和文)近代東アジアにおける「書壇」形成の地域比較研究

研究課題名(英文)A Comparative Regional Study on the Formation of Shodan in Modern East Asia

研究代表者

菅野 智明(KANNO, CHIAKI)

筑波大学・芸術系・教授

研究者番号：90272088

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 12,400,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は、近代東アジアにおいて組織化が活発になった「書壇」に着目し、日本・中国・朝鮮(韓国)という三地域の比較分析を進め、その形成過程の構造的な跡付けを目的とするものである。三地域の個別的研究と、二回にわたるシンポジウムでの地域比較研究を通して、各書壇の形成には、それぞれの地域に固有の事情が反映されており、特に書および絵画・美術に対する認識や、制作および鑑賞・研究への比重、組織の階層性、営利追求の度合い等の諸点は、各地域の書壇を類型的に捉える有効な指標となり得ることが見通された。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、書に関わる人的組織に焦点を当てるものだが、各組織の個別的研究において発掘された書作品や書の理論は、書道史を構成する作品論や書論研究といった各領域に対し、新たな材料を提供することになる。また、本研究では「書画」の枠組に基づく組織も対象に据えたことから、絵画・美術という隣接領域の団体研究にも貢献し得るものがあり、さらには東アジア三地域を相互に比較したことから、三元的な比較文化研究としても波及効果が期待できる。

研究成果の概要(英文)：This study focuses on shodan calligraphy societies, which were actively organized in modern East Asia, and aims to provide a structural trace of their formation process through a comparative analysis of the three regions of Japan, China, and Korea (South Korea). Through individual study in each of the three regions and comparative regional study at two symposiums, it became apparent that the formation of each shodan reflects the unique circumstances of each region, such as perceptions of calligraphy, painting, and art; emphasis on production, appreciation, and study; organizational hierarchy; and the degree of the pursuit of profit. Such circumstances could thus serve as effective indicators for typologically understanding shodan in each region.

研究分野：中国書法史

キーワード：書壇 比較美術史 書道史 近代東アジア

1. 研究開始当初の背景

(1) 研究の現状

従来の近代書道史研究では、書家個人の伝記研究が重視され、書家たちが組織する集団、すなわち「書壇」については付随的に論じられる傾向にある。例えば日本では、安藤搦石が『書壇百年』(1964)を著すものの、その内容は、題目とは裏腹に書家個人への言及が支配的であり、如上の書家志向を象徴している。韓国も同様に、書芸研究の観点から、国史編纂委員会(2011)や李東攀(2014)等の近代書芸通史に書壇への論及はあるが、その独立した専論は見受けられない。一方、中国に関しては、許志浩(1994)に近代の書壇や美術結社に関する名鑑が備わり、これは本研究の基盤として大いに裨益するものである。だが、編年式に各結社の基本情報を提供するのみの同書では、結社相互の関係を体系的に明示するものではない。近代に至り、日本・韓国(朝鮮)・中国という東アジア三地域は、それぞれ書の結社を活発化させたのは事実だが、上記の現状により、それらの結社・書壇を相互に比較しつつ、東アジア総体の中で構造的に把握しようという試みは、着手されてこなかった。

(2) 着想に至った経緯

既に絵画史研究では、「京都画壇」といった組織の地域性に焦点を当てた研究が相応の蓄積を見せ(五十嵐公一 2010 等)、その一方で「宮廷画壇」のように社会階層に注目する研究も備わる(宮島新一 1996 等)など、画壇研究が充実する。これらのアプローチには、直ちに書壇研究へ援用を可能とする方法論的な示唆が得られた。その一方、研究代表者は、これまで中国の篆刻団体「西泠印社」に着目し、同社設立当初の規約や構成員の属性、そして同社の出版物等を手がかりに、同社の性格や活動の方向性について、他の美術団体との比較を踏まえつつ、検討したことがある(菅野智明 2003)。この研究を通して、書家個人にもまして、書壇という組織の研究を体系的に進める必要性を強く認識するようになった。さらに、研究代表者は、これまで「日中比較による書学資料の文献学的研究」(基盤研究(B) 課題番号 24320066)、「日本流入の中国書画に関する新旧収蔵家ネットワークの復元的研究」(挑戦的萌芽研究 課題番号 26580023)といった科研費による研究課題に取り組む中で、国際的な視野から書に関する社会的活動に注目してゆく意義を痛感するようになった。

2. 研究の目的

(1) 目的と問い

以上を踏まえ、本研究は、近代東アジアにおいて組織化が活発になった「書壇」に着目し、日本・韓国(朝鮮)・中国という三地域の主要な書壇に対し比較分析を進め、その形成過程の構造的な跡付けを目的とするものである。かかる跡付けに至るまでに、下記のような各課題について、段階的に解明してゆくこととした。

日・韓・中三地域に林立する各書壇に対し、それらの類型化に資する有用な視点は何か。

上記の視点から分析した場合、各書壇はいかに類別され、相互にいかなる位置を占めるか。

上記の各書壇の位置取りを時系列的に整理するなら、どのような流れが見通せるか。

上記 および にみる書壇の位置取りは、いかなる背景のもとに促されたのか。

(2) 研究の対象

上記のように、本研究は先ず個々の書壇に対し、所定の観点で分析を施すことから着手するが、研究期間の範囲で日・韓・中各書壇を網羅的に分析することは困難を極める。そのため、以下の二点において予め主要な書壇を絞り込み、その分析を集中的に進める。

年代的範囲：書壇の設立年を基準に 1900 年を上限とし、下限は 1940 年代前半とする。日本では明治末～昭和初期、韓国では大韓帝国～日本統治時代中頃、中国では清末～民国中頃に当たる。この期間の書壇設立は、上記の「1 (1) 研究の現状」で掲げた安藤(1964)、李(2014)、許(1994)等に鑑みても活発であり、なおかつ一定の史の変遷を見通せる年代の幅を有するので、範囲として妥当と考えられる。

典型の精選：調査の初期の段階で、相互に類似する書壇が複数見通せる場合には、そのうち最も典型例となり得るものを精選し、重点的な分析対象とする。

3. 研究の方法

本研究は、概ね下記の(1)~(5)の流れで進めていった。初年度、次年度は主に(1)~(3)を中心に組み、その後は(4)、(5)に重点を置いたが、それぞれは並行して進めることも可能な部分があり、進捗状況に合わせて弾力的に取り組んだ。

(1) 予備的検討

主要書壇の選定：関連する先行研究に基づき、類型化の指標となり得る書壇を選定する。

調査の事前準備：各種機関の調査に備え、所蔵目録等により実地調査の候補資料を洗い出す。

(2) 調査

調査機関：年度毎に調査地域を重点化し、同地の候補機関を集中的に調査する方式を採る。

資料の収集：当該書壇の機関紙誌等、直接的な資料に加え、書壇関係者が遺した書作品や筆写資料等、書壇の設立や運営に関連する資料も対象とする。

(3) 分析

観点の設定：目的、活動期間、活動内容、構成員の属性、作風・制作の傾向、官制の関与等。

事例の蓄積：対象書壇ごとに上記の観点から分析し、その結果を地域ごとに蓄積する。

(4) 比較考察

書壇の類型化：上記の分析結果から、書壇間で共通する傾向を抽出し、類型化を図る。

相対的位置付け：各類型相互の位置関係を把握し、その背景についても検討を加える。

(5) 成果の公表

研究代表者および各研究分担者が逐次の成果を関連学会で発表する他、招聘講師による講演も交えた国際的なシンポジウムを開催し、包括的な成果公表の場を設ける。

(6) 研究組織

本研究は三地域それぞれの近代書道(書芸・書法)史研究で実績を挙げている研究者が、当該地域の書壇研究に取り組み、その成果を比較検討するという方式を採った。具体的な組織体制は次のとおりである。研究代表者：菅野智明(研究の統括・中国書壇研究)、研究分担者：矢野千載(日本書壇研究)、高橋利郎(日本書壇研究)、金貴粉(韓国・朝鮮書壇研究)、下田章平(日中書壇交流研究)、高橋佑太(中国書壇研究)

4. 研究成果

(1) 書壇の個別的分析

上記の「3(3)分析」は、研究代表者・分担者がそれぞれ担当とする地域の書壇に対し、個別的に分析を進めた。その成果について、以下に地域ごとに示す。

日本

正筆会・関西仮名同好会の活動：研究分担者の高橋利郎は、仮名書道という日本独自の書芸術ジャンルに特化した書道団体である正筆会を対象に分析を進めた。高橋は、同会設立の経緯として、女子教育上の需要や、乱立する漢字書道団体の間隙を縫って起こった点を指摘するとともに、同会には大規模公募展を志向する一面があったことや、そこで発刊される競書雑誌が、時勢を反映し文検対策を柱とした重要な通信教育ツールであったことを明らかにした。また高橋は、正筆会の主導者である安東聖空が大字仮名制作を重視した点に着目し、安東が後に関西仮名同好会の主要構成員として大字仮名の振興に努めたことについても再評価を試みた。

高村光太郎をめぐる書壇と美術界：研究分担者の矢野千載は、詩人・彫刻家として知られる高村光太郎が、晩年に書への関心を高めたことに着目し、その書道観について、同じく彫刻家であった父・高雲との対比や、光太郎自身の渡欧経験、更には内国勲業博覧会など往時の「美術」の導入との関係から分析を進めた。矢野は、光太郎の理解に、近世と近代、書と文字、東洋と西洋という三種の対立項を意識する必要があるとし、光太郎の書道観について、西洋的近代化が進む中で「書の東洋的深淵」に固有の意義を見出していた点を評価した。加えて矢野は、時の書壇が重視した六朝書道に対する光太郎の見解について、洋画家であり書家でもある中村不折との比較から、その独創性に注目した。

関西の中国書画収蔵界：研究分担者の下田章平は、近代の関西が、時に夥しく流入した中国の書画碑帖について、その一大集積地になり得た点に着目した。その上で、流入の鍵を握った出版社の博文堂、書画碑帖の鑑定や周旋に努めた羅振玉や内藤湖南、それらを競って購得した政財界の要人といった一連の人士を「収蔵集団」の語で括り、彼等の収蔵活動に対する分析を進めた。下田は、こうした収蔵集団の活動が、明治から現代に至るまでの中国書画碑帖の収蔵において、第二期に当たるとし、この期は上記の業者、賞鑑家、収蔵家の三者が密なるネットワークを形成していたことが、良質のコレクションが関西に留まった要因となったことを明らかにした。

韓国(朝鮮)

書画協会の活動：研究分担者の金貴粉は、朝鮮における近代的書画団体の嚆矢である書画協会に焦点を当て、同会設立の背景や、同会の会則に謳う目的・組織体制・活動内容といった諸点から同会の近代的意義について考察した。金は、同会の設立が植民地時代における近代化政策の一環である点を注視するとともに、同会の規定が揮毫会・展覧会・委嘱制作・図書印行・講習所設置といった近代的な諸活動を明記する点を踏まえ、それが同会員に書画の職業化を促す一因であったことを導いた。ただし金は、書画の職業化に至る萌芽的な兆候は、前代の官僚を経験した書人たちに認められるとし、その点を金玉均や呉世昌等の事例から明らかにしている。

朝鮮書道菁華と日朝交流：書画協会の主要会員であった金敦熙は、当時の日本書壇の領袖であった比田井天来の訪朝に及び、天来の知遇を得、天来が構想した『朝鮮書道菁華』の発行に向け、日本に赴き編集作業に従事した。金貴粉はこの事跡に鑑み、実質的に金敦熙と天来の共作と言うべき『朝鮮書道菁華』が、当地の清新な書作例を新たに掘り起こすことによって、時に平凡社『書道全集』で示された宗主国主導の朝鮮書道史を相対化させた点に高い評価を下した。さらに金貴粉は、その後も天来が訪朝し、朝鮮教育会主催の書道展覧会へ審査員を担ったことも取り上げ、日朝書壇の交流が天来を軸に展開したことを特筆している。

中国

豫園書画善会と海上題襟館金石書画会：研究分担者の高橋佑太は、清末の上海に設立した豫園書画善会を対象に、その章程(会則)の分析から同会の性格について考察するとともに、時期を接して設立した上海書画研究会(後の海上題襟館金石書画会)や青漪館書画会、西泠印社、上海書画会、蜜蜂画社といった各団体の章程を横断的に比較分析し、これら章程が時期を経るに従って、徐々に細分化し、緻密に整備されてゆく過程を辿った。なお、豫園書画善会と海上題襟館金石書画会における主要構成員の重複に着目した研究代表者の菅野智明は、両団体が「財芸ネットワーク」と言うべき財界収蔵家と賞鑑に精通した書画家とによる共同体であることを導き、かかるネットワークが両団体設立以前に形成されていることを明らかにした。

震亜図書局から曾李同門会へ：辛亥革命後の上海では、李瑞清と曾熙が鬻書を生業としつつ、多くの門弟を抱え、両者の歿後は、門弟たちが曾李同門会なる書壇を結成するまでに至った。両者の書家としての地位は当然ながら生前に確立しており、それが震亜図書局という出版社を拠点としたことに着目した菅野は、両者(特に李瑞清)の同社への参画のあり方について、その特質を探った。その結果、同社への李・曾の参画は、豫園書画善会等の清末の書画会や、革命後の遺老の集団とも異なる独自の形態が認められたが、その後は書画団体が出版機構を抱えるようになり、その点からも震亜図書局と李・曾との特異な関係性が浮かび上がってきた。

鄧実と神州国光社：清末の国粹主義者、鄧実は、黄節、章炳麟、劉師培等とともに国学保存会を設立し、『国粹学報』の発行に尽力した人物でもある。一方、鄧は「美術」出版に特化した神州国光社を起し、雑誌『神州国光集』や書画論を集成した『美術叢書』の刊行に努めた。菅野は、これを出版社主導の書壇の一類と捉え、往時「美術」の語を先導的に標榜した同社の「美術」観について、『国粹学報』との比較も視野に検討した。結果として鄧の「美術」は実質的に旧来の「金石書画」に相当するもので(『美術叢書』では「金石」を切り離し「書画」へ傾斜する)、劉師培が『国粹学報』で見通した広い芸術領域とは著しく懸隔するものだった。その懸隔の背景には、「金石書画」市場への意識や、この概念の学際性をめぐる立場の相違が垣間見られた。

沈子善と中国書学研究会：中国書学研究会は、第二次世界大戦の最中、陪都の重慶で設立した学会であり、書を専門とする全国規模の学会の先駆とされている。この時期、近代型の書壇から漸く書の学会が誕生することとなり、その点に注目した菅野は、同学会の設立経緯について、特に沈子善がそれを主導した要因について考察した。その結果、沈の教育学専攻に由来する学会設立体験や、彼と教育部との架橋に、同学会設立の一因が見出せたが、一方で彼がこの時期としては類稀な書学専攻と見做せる大学教員であったことも銘記された。この時期は「文・史・哲」といった伝統的な人文諸科学を専攻とし、書学は副専攻に置かれがちだったが、沈の世代では、その専攻化への漸次的進展と、書学の地位向上への積極的な関与が認められた。

(2) 三地域各書壇の比較考察

上記の「3(4)比較考察」は、研究代表者・分担者の個別的研究の成果について、シンポジウムを通して相互に披瀝し合い、各書壇の類型化や書壇相互の位置付けを図ることとし、その背景の考察も試みた。なお、研究期間中、シンポジウムは二回開催し、それぞれ外部講師の招聘によって、本研究に裨益する知見が提供された。以下、において各講師による講演の概要を記し、それを踏まえた議論・考察の成果を及びに記す。

シンポジウム招聘講師の講演

2018年9月、筑波大学東京キャンパスで開催したシンポジウム「近代東アジアの書壇」では、研究分担者5名それぞれの個別的研究について中間発表を行い、あわせて喜多恵美子氏(大谷大学教授)より「朝鮮における書画の位相と近代画壇」というテーマでご講演いただいた。喜多氏は、近代朝鮮美術の動向を1910年代から30年代までを10年スパンで概観され、西洋美術の摂取を重点化した10年代、美術制度の移入が本格化した20年代、留学生の帰国によりジャンルの多様化(一部に東洋への回帰の動向もあり)に向った30年代というような推移を見通された。

2021年8月、オンラインにより開催した国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」では、上記のシンポジウムと同様に研究分担者による研究成果の発表の場を設け、あわせて陳建志氏(国立故宮博物院助理研究員)より「曾熙と向燊(1905~1929)」というテーマで、金昇翼氏(国立中央博物館学芸研究士)より「韓国近代書画壇の形成と書画家たちの実相」というテーマで、それぞれご講演いただいた。陳氏は、先述のとおり、李瑞清とともに上海で鬻芸に専心した曾熙に焦点を当て、曾が同郷の盟友である向燊と共同で書画活動を展開する他、教育や慈善事業も展開していた事跡を掘り起した。金氏は19世紀末に遡って、後の斯界を牽引する主要書画人の閱歴を辿るとともに、彼等の主導で設立された「書画美術会」や「書画協会」、そして「朝鮮美術展覧会」の梗概に触れ、伝統的な「書画」がジャンルの再編を重ねる中で、書画家たちがアイデンティティを模索し続けた点に言及された。

各書壇の類型化・相対的位置

上記のシンポジウムにより、各書壇の個別的な研究と招聘講師の講演により、論及の書壇は、以下の諸点を指標とした類型によって、書壇相互の位置付けが可能と判断された。

・「書画」一体化 / 「書」と「美術(絵画)」の分離：中国や朝鮮では、清末の豫園書画善会や海上題襟館金石書画会、朝鮮の書画協会のように、書画一体の結社が活況を呈したが、「美術」からの「書」の切り離しが進んだ日本では、早くから書道に特化した団体が誕生し、主流となった。

・主要活動(書制作 / 鑑賞・研究)：三地域ともに基本的に書家が書壇の主たる構成員であり、制作と展覧は、当該組織において中核的活動に据えられる傾向にあるが、一方で、古書画・金石の鑑賞を出版活動によって推進する事例もあり、さらには慈善事業や教育・研究活動に比重を置く組織も見られることから、書制作の他に加わる活動内容は多様性に富んでいる。

・組織の階層：日本では小規模書壇の指導者が、大規模書壇の会員となる事例もあり、各書壇には包括的で大規模な組織と、小規模な教育的下部組織とによる階層構造をなすことが容易に見て取れる。一方、中国・朝鮮では、会員が独自に書壇を抱えるという事例はあまり見られず、個人本位の加入であることが日本の場合と鮮明な対比をなした。

・営利追求・商業性：営利を求めず制作・研究に専心する書壇が見られる一方、所属する書作品、もしくは会員所蔵の金石書画の売買を促進する商業性の強い書壇は少なくなかった。なお、中国の場合、神州国光社や震亜図書局等の出版社が、書壇主体の作品もしくは作品図録の売買に加担する事例も見られた。

各書壇の位置付けをめぐる背景

以上のように、各書壇の類型化が相応に見通されたことにより、これをもとに、各書壇・類型相互の位置関係をめぐって、それを決定づける基軸や、背景的要因についても考察した。

・「官 / 民」軸と「文人 / 工人」軸の交差：近代の書壇形成を覆う背景として、最も重要な一つと見るべきは西洋由来の「美術」概念の導入である。上記のように、日本はその導入が徹底され、美術からの書の切り離しが顕著で、書に特化した組織が目立つが、それにしても中国・朝鮮の書画組織と同様に、旧来の文人的・士大夫的志向を保っている。対して書以外の美術は、専門的技能力者の層、言わば工人的作家を「官」が主導して厚遇した。つまり、書は美術から切り離されつつ、「民」の側で文人的性格を温存してきたのであり、書壇の商業性もこの点が大きく起因していると考えられる。

・東洋と自国・自民族：西洋化に抗したナショナリズムは、三地域に共通して認められるが、中国の書が自国の伝統文化に摂取されてきた日本・朝鮮では、東洋・漢字文化圏に対してのアイデンティティと、自国・自民族に対するそれとが二層を構成している。近代日本が中国の古書画・金石を大量に買い求めたのは、前者の意識を体現した一端と理解できる。ただし、その日本では、前近代から和様の書と唐様の書が共存し、近代書壇にあっても漢字と仮名ともに振興が図られてきた。一方、朝鮮の場合、ハングル書芸の興起は遅れるものの、漢字の書に対する一部の表現は、本国に見られない独創的なものがあり、漢字の書のローカライズを試みていた事跡は確かに存する。各書壇の立ち位置には、こうした東洋の共有と自国・自民族的差異化との相克も関与するものと見られる。

引用文献

安藤搦石『書壇百年』木耳社 1964年

国史編纂委員会『韓国書芸文化の歴史』キョンイン文化社 2011年

李東華「植民地時代の官展美術と韓国近代の書についての一考察」『東京・ソウル・台北・長春 官展にみる近代美術』福岡アジア美術館他巡回展 2014年

許志浩『中国美術社団漫録』上海書画出版社 1994年

五十嵐公一『近世京都画壇のネットワーク』吉川弘文館 2010年

宮島新一『宮廷画壇史の研究』至文堂 1996年

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計24件（うち査読付論文 14件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 10件）

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 73
2. 論文標題 清末国粹派における美術と金石書画 国学保存会、神州国光社の刊行物を手がかりに	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 117-130
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 菅野 智明	4. 巻 2021
2. 論文標題 羅振玉をテーマとした二つの研究集会について	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 17～26
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11166/shogakushodoshi.2021.17	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 矢野千載	4. 巻 42
2. 論文標題 高村光太郎と中村不折の書道観 明治・大正期の六朝書道を中心として	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 高村光太郎研究	6. 最初と最後の頁 68-75
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金 貴粉	4. 巻 2021
2. 論文標題 比田井天来と朝鮮書道史	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 69～83, 99-98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11166/shogakushodoshi.2021.69	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 19
2. 論文標題 展評「近代書画 春の黎明の目覚め」	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	6. 最初と最後の頁 175～185
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田章平・早川桂央	4. 巻 48
2. 論文標題 大阪市立美術館所蔵「天発神識碑」の一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 相模国文	6. 最初と最後の頁 63-96
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 14
2. 論文標題 水府本「淳化閣帖」に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 大学書道研究	6. 最初と最後の頁 17-28
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 2021
2. 論文標題 偽王著本系統「淳化閣帖」に関する一考察	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 55～68,99
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11166/shogakushodoshi.2021.55	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋利郎	4. 巻 6
2. 論文標題 近代美術館における書のコレクション形成 松井如流を例に	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 教職課程センター紀要	6. 最初と最後の頁 31-35
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 40
2. 論文標題 震亜図書館の書法出版にみる李瑞清の参画 上海流寓遺老の売芸戦略	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 芸術研究報	6. 最初と最後の頁 1-12
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 高橋利郎	4. 巻 29
2. 論文標題 学界展望	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 89-100
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11166/shogakushodoshi.2019.89	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 71
2. 論文標題 中国書画碑帖の日本流入に関する一考察 収蔵家・菊池惺堂を起点として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本中国学会報	6. 最初と最後の頁 187-200
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 29
2. 論文標題 昭和初期における菊池惺堂の収蔵ネットワーク 大橋廉堂先生入蜀画会を中心として	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 73-87
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11166/shogakushodoshi.2019.73	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 下田章平	4. 巻 47
2. 論文標題 和刻本「淳化閣帖」の一考察 嘉靖積文附載本の伝本系統について	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 相模国文	6. 最初と最後の頁 72-114
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 29
2. 論文標題 近代朝鮮における書の専門化過程とその特徴 官僚出身書人の動向を中心に	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書学書道史研究	6. 最初と最後の頁 59-71
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.11166/shogakushodoshi.2019.45	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 矢野千載	4. 巻 32
2. 論文標題 中村不折小考(二) 「書八美術ナラス」に関連して	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 日本文学会誌	6. 最初と最後の頁 50-58
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 39
2. 論文標題 豫園書画善会と海上題襟館金石書画会：清末上海における書画団体の分立と共存	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 芸術研究報	6. 最初と最後の頁 1-10
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 12
2. 論文標題 書を編み込んだ中国美術通史	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 書芸術研究	6. 最初と最後の頁 53-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 66
2. 論文標題 近代中国の書画界におけるネットワーク形成と結社	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 言文	6. 最初と最後の頁 1-13
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 17
2. 論文標題 『権域書画徴』制作の意図とその意義	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 韓国朝鮮の文化と社会	6. 最初と最後の頁 74-101
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 金貴粉	4. 巻 15
2. 論文標題 呉世昌の植民地期朝鮮における書学とその特徴	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 アジア太平洋レビュー	6. 最初と最後の頁 2-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野千載	4. 巻 31
2. 論文標題 中村不折小考 明治・大正・昭和初期の活動を通して	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 日本文学会誌	6. 最初と最後の頁 16-26
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 菅野智明	4. 巻 11
2. 論文標題 鄭昶『中国美術史』及び史岩『東洋美術史』における書法史の典拠について	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 書芸術研究	6. 最初と最後の頁 53-63
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 矢野千載	4. 巻 30
2. 論文標題 高村光太郎と近代書道史 父子関係と明治時代の書の一側面	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 日本文学会誌	6. 最初と最後の頁 59-69
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計32件（うち招待講演 5件 / うち国際学会 5件）

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 沈子善と中国書学研究会
3. 学会等名 書芸術研究会（第7回例会）
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清代の書論にみられる、童子や初学者向け書法指南について
3. 学会等名 書論書道史研究会第31回研究会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢野千載
2. 発表標題 高村光太郎と中村不折の書道観 明治・大正期の六朝書道を中心として
3. 学会等名 盛岡大学日本文学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 水府本「淳化閣帖」に関する一考察
3. 学会等名 書芸術研究会（第1回例会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 偽王著本系統「淳化閣帖」に関する一考察
3. 学会等名 書芸術研究会（第4回例会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋利郎
2. 発表標題 御歌所歌人の書における役割
3. 学会等名 佛教大学国文学会（招待講演）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清末民初における書画団の規約について
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 近代日本人書家の朝鮮書芸との邂逅
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」（国際学会）
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 大阪市立美術館蔵「天孫神識碑」の一考察
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 高橋利郎
2. 発表標題 大字仮名表現における安東聖空と正筆匯の役割
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 矢野千載
2. 発表標題 中村不折と高村光太郎に見る六朝書道
3. 学会等名 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から」(国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 清末国粹派における「美術」と「金石書画」 国学保存会、神州国光社の刊行物を手がかりに
3. 学会等名 2019年度書論研究会関東部会3月例会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 昭和初期における菊池惺堂の収蔵ネットワーク 大橋廉堂先生入蜀画会を中心として
3. 学会等名 中国文化学会 9 月例会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 和刻本「淳化閣帖」の伝本系統に関する一考察 惺堂旧蔵齋本を中心として
3. 学会等名 第30回書学書道史学会大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 須永文庫における朝鮮書画について 朝鮮人土たちとの交流を中心に
3. 学会等名 「須永文庫資料展 日韓の近代」記念講演会（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清代の書論における模書の展開
3. 学会等名 書論書道史研究会第26回研究会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 近代中国の書画会におけるネットワーク形成と結社
3. 学会等名 福島大学国語教育文化学会2018年度後期学術講演会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 何汝穆試論 清末の書画家にみる師弟と上海
3. 学会等名 2018年度書論研究会関東部会3月例会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋利郎
2. 発表標題 房総の書
3. 学会等名 千葉県書道協会六五回展記念講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋利郎
2. 発表標題 明治一五〇年の書道
3. 学会等名 「墨魂の昂 近代書道の人々」展特別講演（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 書画協会の結成とその活動について
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋佑太
2. 発表標題 清末民初の上海における書画団体の動向 豫園書画善会を中心に
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 日本の中国書画碑帖コレクション形成の要因について 「収蔵集団」を起点として
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 矢野千載
2. 発表標題 高村光太郎と近代書道史 父子関係と明治時代の書の一側面
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 高橋利郎
2. 発表標題 昭和初期の書道団体 正筆会を例に
3. 学会等名 シンポジウム「近代東アジアの書壇」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 近代朝鮮における書の專業化過程とその特徴 官僚出身書人の動向を中心に
3. 学会等名 第29回書学書道史学会大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 近代日中書画碑帖収蔵史の研究
3. 学会等名 平成30年度相模女子大学国文研究会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 中国書画碑帖の日本流入に関する一考察 収蔵家・菊池惺堂を起点として
3. 学会等名 日本中国学会第70回大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 書からみた近代東アジアの美術社団
3. 学会等名 コロキウム「民国期留日美術学生と日本美術」
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 菅野智明
2. 発表標題 近代東アジア 書壇 形成論の構想
3. 学会等名 第3回中国近現代文化研究会大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 金貴粉
2. 発表標題 『権域書画徴』制作の意図とその意義
3. 学会等名 韓国朝鮮文化研究会第18回研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 下田章平
2. 発表標題 ナメタツ事件と日本の書画収蔵界
3. 学会等名 第3回中国近現代文化研究会大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計6件

1. 著者名 高橋利郎	4. 発行年 2021年
2. 出版社 成田山書道美術館	5. 総ページ数 269
3. 書名 『生誕120年松井如流と蒐集の拓本』	

1. 著者名 菅野智明 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 関西大学東西学術研究所	5. 総ページ数 400
3. 書名 山本竟山の書と学問	

1. 著者名 高橋利郎 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 美術年鑑社	5. 総ページ数 415
3. 書名 平成の書 1989-2019	

1. 著者名 高橋利郎 他	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 407
3. 書名 教養の日本美術史	

1. 著者名 高橋利郎 他著、成田山書道美術館編	4. 発行年 2018年
2. 出版社 芸術新聞社	5. 総ページ数 288
3. 書名 成田山書道美術館所蔵名品選 明治一五〇年の書道	

1. 著者名 高橋利郎、松崎中正、田村彩華	4. 発行年 2018年
2. 出版社 成田山書道美術館	5. 総ページ数 531
3. 書名 青鳥居清賞 松崎コレクションの古筆と古写経（古筆篇・古写経編・解説編）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	矢野 千載 (YANO SENZAI) (20326705)	盛岡大学・文学部・教授 (31203)	
研究分担者	金 貴粉 (KIM KWIBOON) (20648711)	大阪経済法科大学・公私立大学の部局等・研究員 (34427)	
研究分担者	高橋 佑太 (TAKAHASHI YUTA) (30803324)	二松學舎大學・文学部・講師 (32664)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	下田 章平 (SHIMODA SHOHEI) (60825826)	相模女子大学・学芸学部・講師 (32707)	
研究分担者	高橋 利郎 (TAKAHASHI TOSHIRO) (80647769)	大東文化大学・文学部・教授 (32636)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計1件

国際研究集会 国際シンポジウム「近代書壇の誕生 東アジア三地域の比較から 」	開催年 2021年～2021年
---	--------------------

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関